

毎日新聞2015年12月20日の記事より引用：

評・岡ノ谷 一夫 (生物心理学者 東京大教授)

音とことばのふしぎな世界 川原繁人著

著者は秋葉原のメイドさんが好きらしい。「ワマナ」さんと「サタカ」さんでは、どちらが萌え^もメイドでしょう？なんていう調査をやっている。はい、ワマナさんが萌えて、サタカさんがツンツンです。音声分析してみると、ナの波形は丸いけど、タの波形はツンツンしている。

次の問題、メイド声の特徴は？ はい、高い音と低い音の差が大きいことです。振り込め詐欺でだまされるのはなぜ？ はい、声の特徴を作る高い音が、電話では伝わらないからです。このように、私たちの言葉を音として見た場合の不思議な現象を、著者はいろいろと紹介してくれる。

親しみ易い^{やす}話の合間に「日本人は英語が苦手」現象について音声学的な説明が入る。日本人はRとLの違いがわからないが、アメリカ人だって「病院」と「美容院」の違いがわからないのだ。母語をしっかりと身につけることと引き替えに、外国語は苦手になるのはどこの国の人であれ同じ。だから、お互いの発音が変なことを許容したコミュニケーションが国際社会では必要なのだということを、著者は提言している。